小池辰雄先生91歳記念特別集会
わが人生
――詩篇第23篇――

１９９５年２月５日
小池辰雄

人生の歌　神交　イエスは大変なひと　神聖なる復讐　本ものであれ　実存をもって恩返し
福音を身証すること　わが人生はキリスト告白　聖霊という火を地に投ぜん

【詩篇23】ダビデのうた

1 **エホバはわが牧者なり、**
われ乏しきことあらじ。
2 **エホバは我をみどりの野にふさせ、**
いこいの水濱にともないたもう。
3 **エホバはわが霊魂をいかし、**
名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。
4 **たといわれ死のかげの谷をあゆむとも**
禍害をおそれじ。
なんじ我とともに在せばなり。
なんじの笞なんじの杖われを慰む。
5 **なんじわが仇のまえに我がために筵をもうけ、**
わが首にあぶらをそそぎたもう。
わが酒杯はあふるるなり。
6 **わが世にあらん限りはかならず**
恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。
我はとこしえにエホバの宮にすまん。

●人生の歌

詩篇の23篇は人生の歌、非常に典型的な讃美歌です。「詩篇」という言い方は本当は「歌篇」なんです。旧約の詩はみな歌ったんだから、詩歌なんです。23篇は短い非常に力強い含蓄のある詩篇ですね。

1 **エホバはわが牧者なり、**
われ乏しきことあらじ。

「あらじ」という言い方は私は嫌いだから、はっきりと断定して書きます。

2エホバは我をみどりの野にふさせ、
いこいの水濱にともないたもう。
3エホバはわが霊魂をいかし、
名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。

この「名のゆえをもて」が非常に大事な言葉です。

4たといわれ死のかげの谷をあゆむとも
禍害をおそれじ。
なんじ我とともに在せばなり。
なんじの笞なんじの杖われを慰む。

「笞」の方は外敵に対するところの守りの、先に少し尖った鉄の杭が打ってある。「杖」の方は道を歩くところの杖です。

5なんじわが仇のまえに我がために筵をもうけ、
わが首にあぶらをそそぎたもう。
わが酒杯はあふるるなり。

「あぶら」は聖霊です。聖霊の象徴が油です。聖霊をくだしてくださる。「わが酒杯」というのは我という酒杯が溢れる。

6わが世にあらん限りはかならず
恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。
我はとこしえにエホバの宮にすまん。

「恩恵と憐憫」という言い方がよく出てきます。あるいは、「恩恵と真実」という言い方で出てくる。

「我はとこしえにエホバの宮にすまん」

旧約の言葉は多少まだるっこいです、これを新約的な気持でもって読んでいかないとね。「とこしえにエホバの宮にすまん」とは、

「キリストという活ける宮に住む」

ということ。キリストは活ける宮です。その中に住んでいる。

私は「信仰」という言葉は嫌いなんだ。「信じ仰ぐ」なんて、いつまでも仰いでいたってダメだ。これはどこまでも、霊現、霊のうつつの世界、霊的な現の世界が我々の現実でなければしょうがない。何をしていても、「み霊に在る」ということ――み霊によってではない――その中に自分を投げ込んでいること。キリストという霊的な存在の中に自分を投げ込んでいく、投身する。信仰ではない。投身です。私は教会の悪口を言うわけではないが、一般の教会はそういった直線的な現実のことをあまり言わないのではないですか。私はいい加減なことでは気がすまない男でね、そういった所になければ力が来ないから。

そうなったら、必ず力がくる。力だとか、光だとか、生命だとか、そういうのが我々の根源現実になっていなければ。

「先生はなぜあんなに元気なのか」

と。元気と言ったって、人間的な元気でも何でもない。上から、そういうのがやってきて、圧倒されている。簡単に言うと、

「キリストに圧倒されて生きている」

ということ。圧倒されながら生きている。

「自分の在り方がどうだこうだ」

と、そんなことはどうでもいい。よく日に三度省みるなんて、昔の人は省みてばかりいるけれども。

●神交

どうぞ、皆さんの「しんこう」の現実は――もし「しんこう」と書きたければ、

「神交」

「神との霊的な交わり」と書けばいい――そうあってください。だから、疲れを知らない。

「今日は、いやだ」

なんていう気持は全然起きない。どんな日でも構わない。雨でも雪でも何でも結構だと。大肯定で生きていく。人生の大肯定で生きていく。

「悩みにも苦しみにもわが力の主よ」

と、さっき歌った讃美歌にもあったでしょ。これは私が自分で作った讃美歌だ。普通の讃美歌はまだるっこいのが多いから、讃美歌を作らざるをえない。私は大体、百くらい作らされた。

「キリスト教」ではない。私は教という言葉は嫌いだ。

「キリスト道」

です。日本人は道の民なんです。道場というでしょ。自分の足でもって歩く所、それが道なんだ。教えではない。キリストの教えではない。

「我は何事をも言う能わず」

と、キリストは自分でそう言っている。

「何も教えているのではない。神さまが言えということを言っているだけのはなしだ」

と。私はキリストのことを「無者」と言うでしょ。キリストのことを

「無者」

なんて言う人が他にありますか。自分の全然無いひとです。無我者なんです。神一切です。父だけ。キリストは、父なる神だけで、自分の意識はない。だから、無者です。この無は

虚無ではない。私が無いこと。だから、

「無者即無限無量者」

なんです。自分がゼロだから、神さまが入ってきて、

「**我を見し者は父を見しなり**」

ということになってしまった。我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えなくてはダメです。このガラクタな人間小池の、どっこいその奥はキリストだというわけです。相対的人間小池はどう批評されたって、私は弁護しませんよ。

「ああその通りでしょう、結構です。だけれども、その奥が見えていませんね」

と、それだけのはなしです。

「千万人といえども我ゆかん」

という孔子の言葉はその角度からは言えるんです。皆さんお一人ひとりがみなそうです。クリスト者というのはそれだけの、はりのある者でないとね。もったいぶったような、体裁ぶったようなクリスチャンなんてのはダメなんだ。私は語って、あなた方は聞いているけれども、語るも聞くも同じこと、同じ世界にいるわけです。

●イエスは大変なひと

本当にイエスというひとは大変なひと(霊止)だから。キリストはどういうひとかというと、私は、

「大変な霊止(ひと)だ」

と言うよりか言い方がない。もったいぶる必要はない。大変なひとだ。なにしろ、ガリラヤ湖の上を歩いてきた。

「**我なり、恐るな。幽霊ではないぞ**」

と。物理法則を乗り越えてしまうのだから、あれは大変なひとだね。あれを普通は、宗教的物語だと言うが、「物語」ではない。「現実」なんだ。だから、大変なひとだという。我々も質的には、そういう大変なひとでなければダメです。普通の、もったいぶったようなことはひとつもいらない。破れ器そのものでいい。破れ器の中にキリストという活ける金剛石が光っている。

集会で聖書の解釈をしたり説明をしたり、そんな集会は要らない。語るも聞くも同じこと、聖書の言葉に圧倒されながら告白して、アーメン・ハレルヤというのが本当の集会というものです。説明というのは二義的なことです。ダメなんです、説明では。聖書の中にどこかに説明がありますか。ないんだ、聖書には。「宣言」だけしている。「告白」だけしている。

預言者がそうです。上からの言葉を預言者は伝えている。詩篇はこちら側の祈りを語っている。預言書の方が詩篇よりももとです。ルターは詩篇を聖書の縮刷だと言ったけれど

も、預言書です。特にイザヤ、エレミヤは預言者の中で素晴らしい。イザヤ書というのは全66章で、聖書66巻と同じ数ですけれども、とにかく旧約のイザヤ書というのは凄い。イザヤ書は愛読してくださいよ、特に第二、第三イザヤ、40章から66章までは。聖書を読んで、楽しくてしょうがない、力が来てしょうがないという読み方をしないとね。朝は旧約を読んで、晩は新約を読むというようなことをしたらよろしいでしょう。

●神聖なる復讐

「一枚の最後に残ったこの衣
　神の為には猶脱がんとぞ思ふ」

これは賀川豊彦の句です。賀川さんは本ものです。私はなにも無教会の悪口を言うわけではないけれども、無教会の先生方は語ることが多すぎた。語ったり、書いたり。けれども、賀川さんは本当に行動的な人です。貧民窟に一緒に入ってトラホームまで移ってしまったけれども、とにかく本当に愛の人でした。『死線を越えて』は素晴らしい本だ。

第一流の本を熟読するのがいい。今の教育者は、小学校から中学、高等学校まで、先生方が本当の宗教の世界を身に持たないで教育ができるかと、私ははっきり言いたい。

とにかく、書きものでは、言いたいことはみな言って、向こうの世界に行きますから。今大きな詩を書いているのは、そういう意味です。

人生は戦いなんだ。ダンテが何と言ったかというと、

「自分は復讐する」

と言った。復讐するというのは、故里から流されたからではない。

「およそ偽りのこと、およそただ現世的なこと、そんなことでもってうつつを抜かしている者に対しては戦う」

ということを、ダンテは復讐と言った。「神聖なる復讐」という。どうぞ、皆さんも、烈々たる魂をもって戦ってください。私の生涯は兄貴の復讐戦なんだ。誰に復讐するというわけではないけれども。だから、私は簡単に死ぬわけにいかない。

私は「死ぬ」という言葉は嫌いだ。我々は死なない。往生する。向こうへ往って生きる。

「往生」

とはいい言葉だ。我々は死にません。ことにキリストから永遠の生命をいただいているんだから。

「小池先生は死んだ」

なんて絶対に言わないでもらいたい。

「小池先生は向こう側に往った」

と言ってくれ。ヒルティも、

「私は次の部屋に行くようなものだ」

と言った。我々は永遠の生命をいただいていますから、死という言葉はいらない。

私は小学校の時間で何が一番好きだったか、あなた方は分かるかな。私は修身の時間が一番好きだった。修身というのは今の言葉でいうと倫理の世界です。修身の時に、先生方は実例をもってお話しくださった。実例で、理論ではない。その実例に非常に感激したわけです。人を動かすものは事実であって、言葉ではない。国語の先生に、

「作文は、どんな題が出てても、必ず自分との関わりで書け」

なんて言われた。

過去の人物でも現在化することができる。今語るがごとくに。単なる想い出ではない。私はいろいろなことが課題になってしまっているから、「ラスト　ローズ　オブ　サマー」という言葉があるけれども、正に私は――ローズではないけれども――「ラスト　ローズ」なんだ。親戚も従兄弟たちも全部いなくなった。兄弟姉妹も全部いなくなった。私は最後に残った一人になってしまった。讃美歌404番の「山路こえて」の歌が正にそうなんだ（独唱）。私はこの歌が好きです。

●本ものであれ

私には

「旅路の終り」

はない。あなた方もそうです。終りなき人間です。完成したらおしまいなんです。完成というのはこれでお終いということでしょ。完成というのはダメなんだ。「未完成交響楽」がいいんだ、シューベルトみたいな。何でも未完成。地上でもって完成したらおしまいだ。ミケランジェロは、

「自分の彫刻は完成していない」

と言って、最後にはノミを投げうったというはなしだ。それが本当なんだ。

404番というのはいい歌だ。昔の人は非常に余韻嫋々（じょう）たる、ロマンチックな気持もまじった歌を歌ったものだ。この頃はどうも、人間の心がガサガサになってしまった。小学校、中学校の先生はしっかりしてもらいたいな。小学、中学のあの頃の教育が、人をつくることが一番大事なんだ。

「試験がどうだ、点数がどうだ」

なんて、そんなことではない。試験なんか要らない。入学試験なんかしないで、

「みんな入りなさい」

と、入れてやったらいい。

「中へ入って遊んでいたら、出てもらいます」

と、そう言っておけば一番いい。

「中へ入って遊んでいる者は、勉強しない者はどんどん出て行ってもらう、そういう

う学校だぞ」

と。天野貞祐先生がそれ式のことを言ったね、

「D大学は入るにやさしく、出るに難しい」

なんて。天野先生の気持通りにはいかなかったけれども。私がD大学の教授をしていた時に天野先生が、

「君は中学・高等学校の校長もしてくれ」

と言うから、

「ええ、いくらでもやります。そのかわり私は宗教を土台にして教育しますから」

「ああ、いいよ」

と。それで校長になった。

あの大政治家のリンカーンでもグラッドストーンでもビスマルクでも、彼らはみな本当に聖書をよく読んだ政治家です。それが身についている。そういう政治家が日本にいるかね。日本の政治家に、総理大臣に、

「聖書を読んだか。日本の仏典を読んだか」

と言ってやりたい。政治でも経済でも何でも、根底は、人間そのものができているか、そして展開してやまないか、ということが一番大事なんです。ゲーテが、

「でき上がった人間はダメだ。生成展開している人間が本当だ」

と言った。さすがはゲーテだ。

西郷南洲というのは素晴らしい方だから、私は尊敬します。南洲は凄い。それから、中江藤樹、頼山陽、あそこらは素晴らしい。

どうぞ、皆さん、いい意味において人生は戦いだから、真理を身をもって現す戦いだから、大いにやってください。今の日本はもうしょうがないから。教会にも、いわゆる無教会にも力がない。あなた方は何人で集会をしようが、

「本ものであれ。永遠を宿している現在であれ」

ということが大事です。

●実存をもって恩返し

私の今日あるのは、母の恩と兄の信仰的な源泉、それで私の今日がある。この母と兄に対しては、実存そのものをもって恩返しをしなければならないわけです。兄貴は北京で仆れましたけれども、シナで伝道しようと思って、ちゃんと伝道の地図まで持っていた。しかし、それが成らずして仆れた。だから、結局、私は課題を担ってます。まだまだこれからが本番ですから、年なんか関係ない。私が人に

「君には私は何歳にみえるか」

と聞くと、大体、70歳台に見る。91歳だと言うと、びっくりする。これは、上からエネル

ギーが来るから仕方がない。永遠の青年であります。あなた方は、永遠の青年、永遠の少女で貫いてください。キリストの生命がきていれば、その現実になる。また、その現実でなければ力がこない。

サマリヤの女がキリストに遇って、

「活ける水をお前にやる」

と言われて、驚いて、

「来たりて見よ」

と町の人々に言った。

「来てごらん、大変なひとがいる」

と。あなた方は方々で集会をしてらっしゃるが、正に「来たりて見よ」です。お説教なんかしているのではなく、キリストを語っている。

「キリストにあって」

キリストを語っている。「について」ではない。何々について語っているのはダメです。その中で告白する世界が本当の世界です。「何々について、に関して」という本はダメだ。ルターが『クリスチャンの自由について』なんて書いたが、なぜルターは「について」なんて言うか。もちろん、あの本はいい本ですけれども、「について」なんて言うことはない。

アッシジのフランチェスコは素晴らしい。あれは身をもって証したひとだね。私はフランチェスコには本当に敬意を表します。最後には大地に伏して、仆れていってしまった。塙保己一はいい。あの人は失明したけれども。あちらではミルトン。ブラウニング、キルケゴール、ドストエフスキー、トルストイ。読みたい本はたくさんあるけれども、あまりたくさん読む必要はない。大事な本を熟読した方がいい。ダンテの『神曲』は凄い。皆さんも、愛読書をもって本当に楽しんでやってください。

●福音を身証すること

「わが人生」なんて言ったって、私は母と兄のお陰で私の今日はあります。だから、これから――多分百歳を突破するでしょう、何歳だっていい――とにかく、この福音を身証すること――からだで証しする、それは筆の上でも何でもいいですが――キリストを讃えることが、わが人生の内容です。自分ではない。キリストを宣明すること。

「来たりて見よ」

というひとに会うようにすること。わが人生の目的は、キリストを現すにある。それだけのはなしです。「神、神」ではダメです。キリストは具体的な神の出店なんだから。

「我を見し者は父を見しなり」

と言ったひとだから。その「我」というのは

「何もできない」

と言ったでしょ。何もできないから、何も言えないから、父が一切である。自分は無者だ。キリストは無者です。我の無きひと。そういう意味でこの無者というのは大事な言葉です。神一切である。神と一如である。

「わがうちなるキリストを見よ」

と、皆さん一人ひとりははっきり言える。「見えないか」と。そんなことを言う必要はないけれども、そういう気持でいることが大事です。我々はキリストを伝えるためにあるんだから。キリストというのは大変なひとだ。「キリスト教」ではない。キリストです。もし言うなら、

「キリスト道」

です。正に、救主キリスト、神の顕現者キリスト。それが最後は十字架だからね。けれども、甦った。甦ったと言っても、息を吹き返したということではなくて、

「霊的な実存として新しく現れた」

ということです。甦り（よみがえ）という言葉は私はあまり好きではない。

「汝ら、祈って待っていろ。聖霊をくだすから」

と。それで、使徒たちが立ち上がって、このキリスト道の歴史が始まった。それを一番よく受けとったのがパウロです。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、キリストわがうちに生くるなり。我とキリストとは一つなり」

と。パウロは選びの器だね。彼は復活のキリストにダマスコ途上でひっくり返された、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。ユダヤ教のチャンピオンだったのがひっくり返されて、キリスト道に変わってしまった。ダマスコ途上のパウロのひっくり返りは鮮やかなものだ。「回心」ではない。心がめぐったのではない。

「回身」

です。存在そのものがひっくり返された。単なる心ではダメだ、全存在がひっくり返されないと。いわゆるキリスト教ではダメなんだ。我々のはキリスト道、キリストそのものです。大いに、あなた方はそういう戦いをやってくださいよ。そして、本当のことを告白していると、人は動くんです。そうでない説明的なことは、いくら語ってもダメです。人間の魂之霊（たましひ）はそういうようにできている、本ものに感動するようにできている。

●わが人生はキリスト告白

我々の人生なんてのは、滑ったり転んだり様々です。いいですよ、どうだって。けれども、その底流には何者もひっくり返すことのできないものが流れている。止めることができない霊的な河が流れている。黙示録にあるね、そういう河のことが。

聖書なんてひとつも難しくない。

「ああ、その通りです」

と。註解書なんかひとつもいらない。そういう楽しくて力が来てしょうがない、光がきてしょうがない、生命がきてしょうがないという、しょうがない世界、

「止むを得ざるなり」

という世界です。止むを得ざるなりという世界が本ものの世界です。

「これか、あれか」

なんて選んでいるのではない。圧倒されている世界です。

「私は聖書に圧倒されています。キリストに圧倒されています。私はクリスチャンでも何でもありません。キリストに圧倒されている人間です」

と。それでいい。随分、私は乱暴なものの言い方をしましたが、皆さんはその気合は分かってくださる。そういうわけです。

「わが人生はキリスト告白である」

というのが、これが本当の内容です。滑ったり転んだりしているダメな破れ器がキリストを身体（からだ）で証しているというわけです。

「今までダメでしたから、これから段々ダメでなくなります」

なんて、そんなことを言っているのではない。

「私は相変わらずダメです、終りまで。ダメで結構だ。ただキリスト告白はこれは本ものだ」

と、そういうことで進んでいきます。

「わが人生はキリスト告白なり、キリスト身証なり」

というわけです。「わが」というのは、あなた方一人ひとりが「わが」ですよ。小池ばかりではない。あなた方一人ひとりが、「わが人生はキリスト告白なり」といって進んでいく。そういう自伝はいくらでもお書きください。そうでないいわゆる自伝なんかいらない。

●聖霊という火を地に投ぜん

「我は火を地に投ぜんとて来（きた）れり。

素晴らしい言葉だね。私は聖霊という火を地に投ぜんとて来たと。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

この火が燃えれば、もうあとはどうでもいいんだと。

されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼（せま）ること如何許（いかばかり）ぞや。」（ルカ12・49～50）

「十字架を通らなければ聖霊はやらないぞ。十字架抜きの聖霊ではないぞ」

ということです。だから、聖霊の土台は十字架なんです。十字架と聖霊は分けてはいかん。十字架だけでもダメ、聖霊だけでもダメです。

「十字架・聖霊」

これがキリストの本当の証なんです。

「私が霊的に甦ったら、お前たちは祈って待っていろ、そうしたら、お前達に聖霊がくだるから」

と。それで、使徒たちが――女の人も混ざっていたけれども――祈っていたら、聖霊のバプテスマが始まった。ペンテコステです。ペンテコステが本当の歴史の始まりだ。キリスト宗教史の始まりです。

みんな、そういうことで、キリストの火に燃えてくださいよ。

「火を投ぜんために来た」

のだから。「受くべきバプテスマ」とは十字架、贖罪です。我々の過去的な、在来の人間小池はすっ飛ばされてしまって、そして、聖霊の新しい小池が生きている。ものを言っているのは聖霊の小池だということ。こういうわけです。あなた方一人ひとりがそういうわけです。だから、このルカ伝12章49、50節は大事なところです。

「われ地に平和を与えんために来（きた）ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり。」（ルカ12・51）

本ものが来るというと、いい加減なものとの戦いが始まる。「分争」とはそういう霊的な戦いのことです。

小池政美の聖書の扉に、

「救われる者のわが家族親族にわれ独りならぬことを祈りて」

と書いてある。だから、私は兄貴の跡を継いだわけです。

結論は、

「我々の一人ひとりの人生はキリスト身証にあり」

ということです。キリストを証しないような人生は、どんなにいわゆる立派そうにみえても、そんなものはダメなんだ。仏道の世界だったら、お釈迦さんの証だ。